

河村家文書の魅力

住友史料館研究員
海原 亮

河村家は、弘化2年(1845)にとりたてられた、彦根藩医の家である。現在、重要文化財『彦根藩井伊家文書』(彦根城博物館蔵)におさめられている「医者由緒帳」は、藩医各家の由緒や履歴を書きあげたもので、もちろんそこには、純碩・純達の二代(正確には、兄弟、養子関係)におよぶ、河村家の名前をたしかめることができる。

この由緒帳には、それぞれの藩医がどのようなつとめをはたしたのか、給禄・賞罰の履歴が、簡潔にまとめられている。

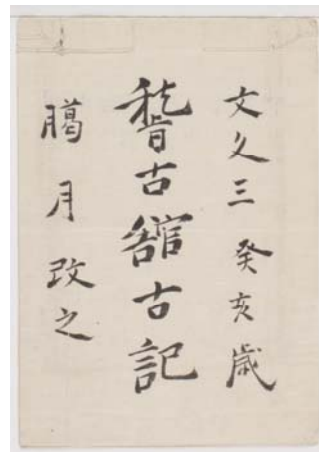
たとえば、純碩の場合、任用当時の禄高はわずかだったが、その後、江戸や相州浦賀(衆知のように、彦根藩のかかわった海岸防備の軍役である)へたびたび出張したことが褒賞され、最終的には50石に達する。だが、医師としての河村家の活躍を、由緒帳だけからこまかく追うことは、むずかしい。

そもそも江戸時代を通じて、彦根藩には、少なくとも30家以上、藩医の家が存在したはずだが、それが現存し、あるいはその当時の歴史資料を伝えているような例となると、私の知る限りでも、4~5家くらいに限られてしまう。河村家に史料が残されたのは、きわめて貴重なことなのである。

滋賀医大図書館蔵の「河村文庫」は、実に約750点に及ぶ古医書・医療器具の圧倒的な存在こそ、まずは誇るべき至宝だろう。

だが、あいにく私の専門は歴史学なので、興味・関心がやや違うところに向いてしまう。すなわち、純碩のような医師たちがどのような仕事・生活を送ったのか、あるいは身分状況はどうか、そのような疑問である。幸い、文庫には「河村文庫古文書」という、まとまった歴史資料もあり、風変わりな私の疑問にさえ、懇切に答えてくれる。

たとえば、「稽古館古記」と題された、小さ



稽古館古記

な冊子がある。

「稽古館」とは、寛政11年(1799)7月29日にオープンした、彦根藩校のことである(天保元年以降、「弘道館」と改称)。当時の藩主・井伊直中(第11代)が藩士の建言をとりあげて実現したもので、創立にあたっては、約5年もの間、全国諸藩の教育制度や、設備などの視察が入念におこなわれたという。藩校では、もちろん藩士の全体を対象に、儒学や兵学の授業がおこなわれたが、あわせてとくに藩医を対象とした専門教育をおこなう「医学寮」も設けられた。

河村家古文書の「稽古館古記」は、この医学寮にかかる記録である。藩医・河村家の二代・純達は、文久3年(1863)11月、医学寮の「会頭御用懸」(参加者の藩医をとりまとめる役)に任じられており、記録が手元に残されたのも、そのあたりの事情に拠るのだろう。簡単なメモ書きだが、設立当初の事情から、寮の制度や授業の実態など、幕末に至る出来事をおおよそカバーし、実は、研究史の欠を補う貴重な内容を含んでいる。

というのも、これまで彦根藩校の設立事情や、藩士教育の内容については、中村勝知(不能齋)の筆による『旧彦根藩学制史』が、ほぼ唯一の研究成果であった。しかし、医学寮については「医学ハ業トスル者ノミロヲ定メテ講習ス」、「医師若年輩ヲ会シ医書ヲ輪講セシメテ之ヲ聴キ討議質問セシメテ疑義ヲ決ス」と説明されるのみであった。中村(1834~1906)は、藩校でも活躍した徂徠学派の著名な儒学者だが、その同時代に生きた彼でさえ、医学寮のことを書き伝えるための、適当

な文献を手にすることができなかつたのだ。

医学寮がスタートした頃のことになると、なおさら事情がよくわからなかつた。だが、「稽古館古記」は、そのあたりの事情にもふれている。しかも、新しい事実を織り交ぜて語りかけてくるのである。

たとえば、藩校が出来た4ヶ月後、寛政11年11月10日付で、藩医全体を対象に、仰せ渡された書面が載っている。現代語で読み下してみよう。

「医道は人命に関わり、大切なことであるので、言うまでもないが、藩医の面々はそれぞれの学術を油断なく、稽古するように。若い医者、子弟の者はもちろんのこと、藩医の家を守っているようなベテランでも、公務の合間には藩校へ出かけ、医学・儒学とも、勉学にいそむべきである。藩校には医学寮を併設するので、藩医たちで申し合わせて、医学書の勉強会などをおこなうように。」

藩は、自らが抱える藩医に対して、このようにきわめて具体的な指示を出した。藩校設立当初のことで、医学寮に対する期待とあふれる意気込みのあらわれ、ともみなされようが、医学・医療への関心の高さ、考えかたがはっきりと現れていて、たいへん興味深い一文ではないか。

しかし、世の常として、このような学習意欲といったものは、長続きしない。それから30年余りが経過した天保期ごろになると、そもそも藩校自体の弊風が表面化し、大きな問題となる。医学寮でも、出席者の激減に悩むようになった。

天保10年(1839)に出された指示によれば、医学寮には、「諸生人数書」(後に「出席名前書」、「出講名前書」などと呼ばれる)を作成することが求められた。すなわち、誰が医学寮で学ぶべきか、その対象となる藩医の名前を具体的に書き上げ、藩に提出させたのである。また、医学寮の授業日に欠席をする場合は、「闕(欠)席書」の提出が求められ、これらはすべて、稽古奉行という藩校の役人によって、管轄された。このような調子で、藩はサボタージュへの対策を講じ、強く出席を促さなければならない状況となった。そういった実態も、「稽古館古記」から、はっきり読みとることができる。

実は、若手の医者に対する専門的な教育に

関して、藩校・医学寮は、さほど重要な意味を持たなかつた、というのが、私の推測である。どういふことかと言うと、江戸時代の医学・医療は、特別な技能の伝承といった要素が大きく、師匠と弟子という個別の人間関係のなかで、ほんとうの学習が成立した。これは、たとえて言えば、芸能の世界に近い。彦根に限ったことではないが、この当時、そもそも学校というシステムがうまく機能する保障は、なかつたのだ。

医者養成は、おそらく藩医が個別に弟子をとり、藩校以外の部分でおこなわれていたのが実態だろう。河村家でも、実はそのような教育がされていて、そのことは「留文録」という史料から確かめることができる。

この「留文録」が作成された経緯は不明だが、明治維新後の記事も多く、純碩・純達の二代に及んで、公私にわたる諸事件を記した備忘録である。全九七丁に及ぶ大部で、実に豊富な内容を含んでいる。

家の内向きのことはもちろんだが、純碩が藩医に取り立てられたさいの事情や、藩医としての諸活動(御能拝見、江戸行、相州行、役料など)、医師証文(藩士を診察したさいのカルテ)、幕末・京都情勢の風聞書、書状などあらゆる方面の記録がみえる。

時事的な関心に沿って、たとえば、彦根藩に課せられた相州防備、京都御所警備にかかる記録類は、「留文録」以外にも、多くの史料が残されている。幕末政治史に興味をもたれる方にとっても、注目すべき「河村文庫古文書」だと言えよう。

* * *

今から5年ほど前、当時すでにホームページ上にアップされていた「河村文庫古文書」の目録を発見(?)したときの喜びは、今でも忘れられない。私はわが目を疑い、IT技術の進歩は侮れないものだ、などと感心するやいなや、すぐに閲覧のために、滋賀医大図書館へと赴いたことである。

「河村文庫古文書」には、まだ他にも、藩医の仕事や日常生活、公・私の両面におよぶ貴重な史実が、多く書き留められているはずだ。これからも、歴大な史料との格闘をつづきたい。そして少しでも多くの方々と、この楽しみを共有したいと考えている。

(うみはら りょう・専攻 日本近世史)